シリーズ　足の機能に障害がある人の靴　⑤

―イギリスのビスボーク靴―

子どもの靴を考える会　**大　野　貞　枝**

イギリスでは病院で提供された靴が気にいらず、ビスボーク（イギリスでオーダーのことをいう）で足に合ったおしゃれな靴を作る人がいる。

そこで今回は、足に障害がある人の靴も取り扱う３軒のビスボーク靴店の日常を、筆者がロンドンで撮影した写真を中心に紹介したい。

（写真１）Ｃビスボーク靴店のウインドウ
既製靴も扱っている

■二種類のビスボーク靴

ビスボークの、足に障害がある人の靴の製法は大きくわけて二種類ある。一つは伝統的な製法の手縫いのウエルト製法によるものと、もう一つは解剖学に則ったフットベッドを挿入する製法によるものだ。価格は日本円にして約20万～30万だ。

（Ａ店）できるだけおしゃれなラインで

手縫いのウエルト製法のＡビスボーク靴店にも、足趾の変形等の症状で既製靴があわない人が靴を作りに来る。

熟練職人は彼等の靴をできるだけきれいな形に見えるように、木型のラインを工夫する。フットベッドは挿入せず、底の形状や縦アーチの削り方に苦心する。（写真３）の木型からわかるように足の変形をカバーしてかつ、おしゃれな紳士靴に仕上げるのが彼等の腕の見せ所だ。

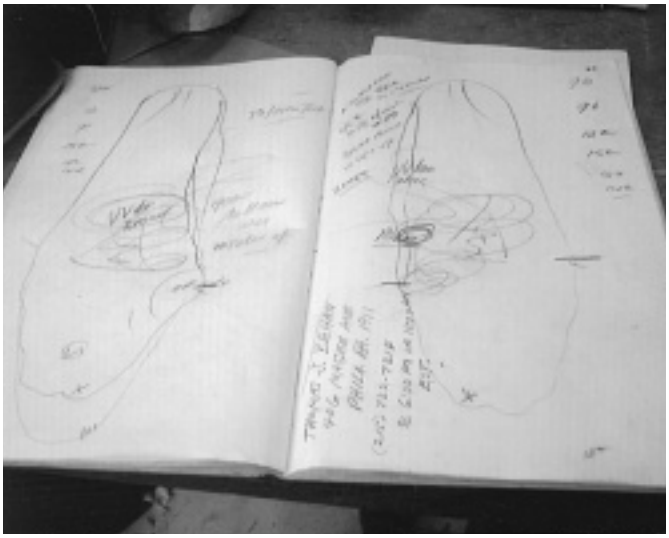
（写真２）靴店内に飾られていた絵
上と同じ店で

（写真３）顧客の足に合わせられるか否かは靴型に大きく左右される。Ａ店の靴づくりは、足にフィットさせた上にいかに変形が目立たない靴型に仕上げるかがポイントだ。写真は、左右の形は違うがラインはあくまでなめらかな靴型。

（写真４）作業場は二階にある。階下は重厚な雰囲気のショップだ。通りに面しているこの部屋は明るく、見おろせば行き交う人が見える。

（写真５）「こういう風に使うんだよ。」と左写真中央の木型を削る機械の使い方を教えてくれた。

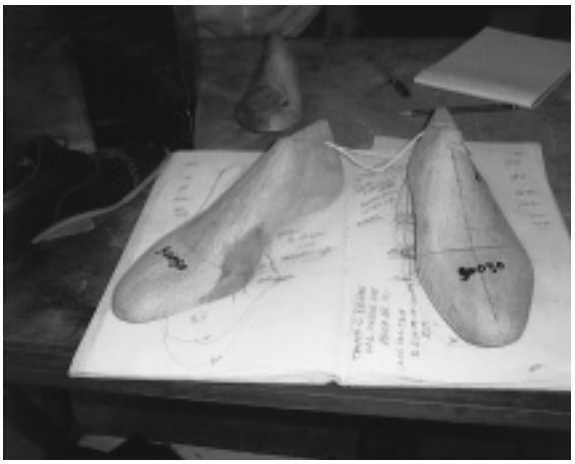
（写真６）「10年位前から若い日本人がよく見習いに来るようになった。ところが私が熱心に教えて、２～３年して技術をマスターして日本に帰っても仕事がないらしい。靴とは関係がない仕事についていると手紙がくる。それなのに靴を作りたいと来る若者は後を絶たない。日本はstrengeだ。」と彼は首を振った。



（写真７）足の外郭線と測定値

「あなたには落書きのように見えるだろうけど、このグルグル描いたラインは意味があるんだ。私にしかわからないけれどね。」

縦アーチ（土踏まず）の部分には、どの顧客の外郭線にも渦巻きのようなラフな曲線が描かれていた。それを上の熟練職人はこう説明した。



（写真８）顧客のデータとその靴型

データには足の外郭線と数箇所の訂測値が書き込まれている。採寸のみで採型はできないので、重症の患者の靴はできない。

（写真９）製作過程

（Ｂビスボーク靴店内のショーウインドウに展示してあった）

（写真３～８は、変形のある足の注文も受けるＡビスボーク靴店で。）

（B店）解剖学に則ったフットベッドを挿入

足に障害がある人の靴を専門にしているBビスボーク靴店だ。イギリスの現況ではプライベートで整形靴を製造する場合、特にその資格は問われない。

直接来店する顧客の他にプライベートのポダイアトリスト（足病医）やオーソテイスト（装具士）の処方箋を持ってくる場合もある。

（写真10）ビスボークの靴店の看板　ただし今のオーナーがこの場所に開店してからは、まだ数年だ。

（写真11）上の看板の下にフットベッドの絵が描かれている、整形外科的注文靴の立看板が置かれていた。

（写真12）顧客の足のデータを取るのはオーナー。ドイツの整形靴マイスターの店ではおなじみの椅子だ。足の解剖図が後ろに貼られている。

（写真13）アッパーを釣り込む。靴職人の膝の上が彼等の作業空間であることは古今東西変わらないようだ。彼の後ろには多数の木型が置かれた棚がある。

（写真14）アッパーの紙型を靴型から取る職人。整形靴を扱う二つの靴店で働いているようだ。

（写真17）日本人の職人が一人いた。「ロンドンの学校で製靴技術を習得して働き口を探していたところ、ここがあったんです。」といい、手縫いで靴を作っていた。「でも特に整形靴を作りたかった訳ではありません。」

（写真15）足を直接計測したオーナーと打ち合わせをしながら作業を進める。靴型の底には解剖学に則った凹凸がついていた。

（写真18）仕上げに余念がない。フットベッドを入れるため、機械の上に並ぶ靴は深底が多い。

（写真16）ミシン職人がアッパーを前にしたところ。すぐ側にはミシンが置いてあった。

（写真19）店内のディスプレイには、各種の足底板とコンフォート系の既製靴と、中足骨パットやアーチパットも展示されていた。

（写真20）革を選択してもらうために各種用意している。

（写真９～20はＢビスボーク靴店で。）

（Ｃ店）整形靴も作る歴史あるビスボーク靴店

創業1857年のこのＣビスボーク靴店のオーナーとはドイツの整形外科靴のマイスターが集まる大会で会った。彼は、その整形外科靴技術者連盟のメンバーが、イギリスにも約100人はいると話してくれた。ロンドンに帰ったらぜひ私の店に寄りなさいと言ってくれ、１年ぶりに訪問が実現した。

（写真21）既製靴も置いている店内は古色蒼然たるディスプレイだ。（中の絵は写真２）

（写真22）店の歴史を感じさせる古い整理箱の下には、修理の靴が並ぶ。

（写真23）完成した患足（障害がある方の足）の靴。健足（健康な方の足）の靴は普通の大きさだ。

（写真24）この靴店でも日本人が働いていた。彼は日本の大手企業を退職して、ロンドンの靴学校を終了後、この靴店他で見習いをしていた。日本に帰国後、就職先を探していたが結局靴とは関係のない業種に落ち着いたと連絡をもらった。

（写真25）足の変形に忠実な靴型。ラインが凹凸しているところが（写真３）と違うところだ。

（写真26）靴型がかけられている壁
年代を経てアメ色に変色した古い靴型が多い。

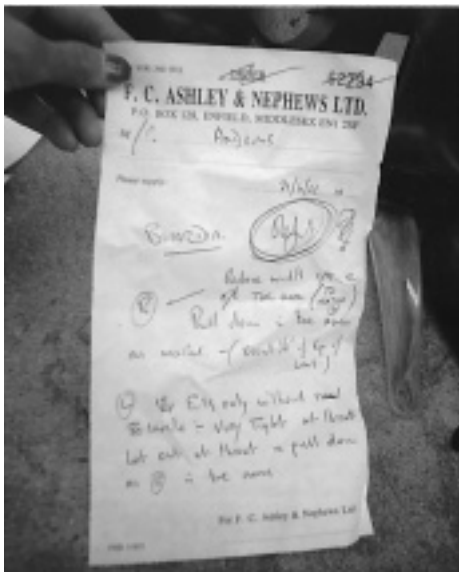
（写真27）靴型

（写真28）靴型とアッパー

（写真29）地下にある作業場は、時代は経ても作業工程や道具は変らない靴づくりの光景がみられた。釣り込み職人の側にはビールビンが見える。

（写真30）B靴店と同じ職人が働いている。

（写真31）足のデータが書かれている。



（写真32）修理の依頼　very tightという文字が見える。

（写真１～２、21～32は整形靴も扱うＣビスボーク靴店で。）

イギリスには注文靴を主に扱う靴店がまだ健在だ。しかし、その数は減り続けていてロンドンでは現在数軒しかない。彼等の今後は、整形靴との取り組みかたがその盛衰を左右するのかもしれないとこの取材を通じて思った。

日本の数少ない注文靴を扱う店にも、足の障害がある人の依頼が多い。

また一方では積極的にこの分野の靴を取り扱う靴店が増えている。彼らは最新のドイツ整形靴の製法を全面的に取り入れており、こと整形靴に限っていえばロンドンのビスボークより日本の方が進んでいるだろう。これは日本の靴の歴史が浅いことが幸いした数少ない例かもしれない。

次号は、日本で整形靴を扱う靴店を紹介したい。